

將於家交通相住、比頃懷任生一男子、時其家犬、十二月十五日生子、彼犬之子、每向家室而期刻、匪皆嗥吠、家室脅惶、告家長言、此犬打殺、雖然患告而猶不殺、於二月三月之頃、年米春時、其家室於稻舂女等、將充間食入於碓屋、即彼犬子將咋家室、而追犬即驚、恐成野干、登籬上而居、略

〔日本書紀三十〕朱鳥元年武天是歲、虺犬相交、俄而俱死、

〔日本後紀十七〕大同四年正月壬辰、有犬登太極殿西樓上、吠、鳥數百群翔其上、

〔日本紀略淳和〕天長七年八月庚午、犬登栖鳳樓而吠、

〔古事談王道后宮〕延喜野行幸之時、被入腰輿之御劔、石付落失云々、希有事也、古物ヲトテ、犬ニ令驚給テ、タカキ岡上ニテ御覽ジケレバ、御犬ノ件石付ヲクハヘテマイリタリケレバ、殊ニ興ジテ令悅給ケリ、略

〔大鏡八〕六條式部卿の宮と申しは、延喜帝一腹御兄弟におはします、野の行幸せさせ給ひしに、此宮供奉せしめ給ふべかりけれど、京の程遅參せさせ給ひて、かつらの里にぞまいりあはせ給へりしかば、御こしとめて、さきだて奉らせ給ひしに、なにがしといひし犬かひの、犬のまへ足をふたつながら肩に引こして、ふかき河の瀬わたりしこそ、行幸につかうまつり給へる人々さながら興じ給はぬなく、御門も興ありげにおぼしたる御けしきにこそ、みえおはしまし、か、

〔今昔物語二十八〕中納言紀長谷雄家顯狗語第廿九

今昔中納言紀ノ長谷雄ト云フ博士有ケリ、才賢ク悟廣クシテ、世ニ並ビ無ク止事无キ者ニテハ有ケレドモ、陰陽ノ方ヲナム何ニモ不知ザリケリ、而ル間狗ノ常ニ出來テ築垣ヲ越ツ、尿ヲシケレバ、此レヲ怪ト思テ、□□ノ□□ト云フ陰陽師ニ、此ノ事ノ吉凶ヲ問タリケレバ、某ノ月ノ某ノ日、家ノ内ニ鬼現ズル事有ラムトス、但シ人ヲ犯シ祟ヲ可成キ者ニハ非ズト占タリケレバ、其ノ日物忌ヲ可爲キナリト云テ止ヌ、而ル間其ノ物忌ノ日ニ成テ、其ノ事忘レテ物忌ヲモ不爲ザ